

## 研 究

# 子育てによる親役割達成感と親の心理的な 発達との関連性

寺 菌 さおり

### 〔論文要旨〕

本研究は、2～4歳の子どもを育てている親を対象に父親と母親との親役割達成感の違いを検討すること、親役割達成感と心理的な発達との関連について明らかにすることを目的にした。調査対象者は保育園、幼稚園に通う子どもをもつ夫婦169組であった。

親役割達成感について検討した結果、父母間の親役割達成感の平均値に差はみられなかったが、母親の親役割達成感には子どもの所属クラスや出生順が影響していることが示された。また心理的な発達について父親は環境制御力、人格的成長、人生における目的、積極的な他者関係が、母親は環境制御力、自己受容、人格的成長、人生における目的、積極的な他者関係が親役割達成感の高さと関連していることが明らかとなった。

Key words : 親役割達成感, 心理的な発達, 子育て

## I. はじめに

近年、核家族化、女性の社会進出などにより父親も子育てに参加することが求められている。しかし子育て期にある男性の労働時間は長く、家族と過ごす時間が短い<sup>1)</sup>ことから、子どもと過ごしている間に育まれる感情、親役割に対する自己評価など父親と母親とでは異なることが予測される。

母親が子どもとの人間関係や自己の成長の点で満足している程度を母親役割達成感という<sup>2)</sup>。子育て期の母親の母親役割達成感はその時期の母親よりも高く、また母親役割達成感とは心理的な発達と関連している<sup>3)</sup>。一方、子育てに参加する父親への影響について、子育て関与の高さと人格的変化との間に関連は認められて

いない<sup>4)</sup>。しかし子どもとの情緒的交流ができていると認知することが子育て参加の動機づけとなり父親の発達が促されている<sup>5)</sup>ことから、母親のみならず父親においても親役割に対する肯定的な評価は子育て参加への動機づけとなり、親の発達が促されることが考えられる。そこで本研究では、2～4歳の子どもの親を対象として父親と母親では親役割達成感異なるのかどうかについて検討していくことを1つ目の目的とする。また、父親、母親それぞれの親役割達成感と心理的な発達との関連について明らかにすることを2つ目の目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象者

対象者は保育所および幼稚園に子どもを預け

The Relationship between Parents' Role Attainment and Psychological Development of Parents Rearing Infants [1950]

Saori TERAZONO

愛知県立大学看護学部 (研究職)

別刷請求先: 寺菌さおり 愛知県立大学守山キャンパス 〒463-8502 愛知県名古屋守山区上志段味東谷

Tel: 052-736-1401 Fax: 052-736-1415

受付 07. 7.17

採用 09.11. 6

ている父親と母親377組であった。170組から夫婦両方の質問紙が回収されたが（回収率45%）、回答に不備のあった1組を除く169組を分析の対象とした。

## 2. 調査方法

北海道、徳島県、愛媛県、鹿児島県の保育所3園、幼稚園1園の計4園に調査協力を依頼した。園ごとに園長、または学級担任が2歳児、3歳児、4歳児クラスの父母に質問紙を配布し、家庭で記入後、封をして園に提出してもらったものを回収した。また筆者の友人・知人を介して保育所および幼稚園に通う子どもの父母に質問紙を配布し、郵送法にて回収した。質問紙に、回答は統計的に処理されること、調査は強制ではないことを明記した。調査時期は2006年8月中旬から10月初旬であった。

## 3. 質問紙の内容

### 1) フェイスシート

親の性別、年齢、子どもの所属クラス（2歳児クラス、3歳児クラス、4歳児クラス）、家族構成の記入を求めた。

### 2) 親役割達成感

土肥ら<sup>2)</sup>によって作成された母親役割達成感尺度を用いた（表1）。この尺度は母親が子どもとの人間関係や自己の成長の点で満足している程度を測定するものである。本来、母親を対象にして作られた尺度ではあるが、3組の親（父親3名、母親3名）に評定してもらった結果、内容や表現等に問題がなく、また「子どもの成長に最も喜びを感じている」、「子どもと楽しく遊んでいる」、「子どもによい環境を与えている」など本尺度に含まれる項目は母親役割の達成感に限らず子どもとの関係性に着目して作成され

た達成感を示す内容であるため父親への使用を試みた。この尺度は計10項目からなる。子育てを通しての考えについて「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」までの5段階評定で回答を求めた。点数が高いほど親役割達成感が高いことを示すものである。

### 3) 心理的な発達

Ryff<sup>6)</sup>の概念や尺度を基にして作成された西田<sup>3)</sup>の心理的 well-being 尺度を、東<sup>7)</sup>によって因子負荷の高い項目を選び出された短縮版尺度を用いた。心理的 well-being は生涯にわたる肯定的心理機能を「環境制御力」、「自己受容」、「自律性」、「人格的成長」、「人生における目的」、「積極的な他者関係」の6次元により説明された概念であり、成人期全般にわたる人格的成長を捉えることができる。「環境制御力」とは複雑な周囲の環境を統制できる有能さの感覚、「自己受容」とは自己に対する積極的な感覚、「自律性」とは自己決定し、独立、内的に行動を調整できるという感覚、「人格的成長」は発達と可能性の連続上において、新しい経験に向けて開かれる感覚、「積極的な他者関係」とは暖かく、信頼できる他者関係を築いているという感覚<sup>3)</sup>と説明されている。この尺度は各次元、5項目、計30項目からなる。「現在のご自身の考え方」について「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」までの5段階評定で回答を求めた。点数が高いほど心理的 well-being の各次元の得点が高いことを示す。

## III. 結 果

統計処理には、統計パッケージ SPSS15.0J for windows を使用した。

### 1. 調査対象者の特性

本研究では169組の親のデータを分析の対象とした。回答を得た親の年齢の平均は父親35.9歳（SD = 5.38）、母親33.7歳（SD = 4.15）であった。

また調査対象者の子どもの質問紙配布時のクラスと出生順は表2に示した。

本研究の家族構成について核家族は150組（88.8%）、大家族は19組（11.2%）であった。家族構成については、多くが核家族であったこ

表1 親役割達成感尺度

- |    |                       |
|----|-----------------------|
| 1  | 子どもは私をとても信頼している       |
| 2  | 子どもの成長に最も喜びを感じている     |
| 3  | 子どもは私を十分愛してくれる        |
| 4  | 子どもの将来が大変楽しみにできる      |
| 5  | 子どもはみんなから愛されている       |
| 6  | 子どもはどんな困難にも耐えられる自信がある |
| 7  | 子どもと楽しく遊んでいる          |
| 8  | 子どもは私の生きがいである         |
| 9  | 子どものおかげで私が成長している      |
| 10 | 子どもによい環境を与えている        |

表2 子どものクラスと出生順 (人)

|        | 出生順 |       |
|--------|-----|-------|
|        | 第1子 | 第2子以降 |
| 2歳児クラス | 35  | 29    |
| 3歳児クラス | 26  | 28    |
| 4歳児クラス | 31  | 20    |

とから、特に分類せずに分析した。

2. 信頼性の検討

本来、母親用として作成された母親役割達成感を父親に使用したため親役割達成感尺度の信頼性を検証した。Cronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、親役割達成感尺度では $\alpha$ 0.88(父親 $\alpha$ =0.89, 母親 $\alpha$ =0.87)と十分な信頼性が保たれていた。また心理的well-being尺度では、「環境制御力」 $\alpha$ =0.64(父親 $\alpha$ =0.55, 母親 $\alpha$ =0.81), 「自己受容」 $\alpha$ =0.69(父親 $\alpha$ =0.67, 母親 $\alpha$ =0.70), 「自律性」 $\alpha$ =0.77(父親 $\alpha$ =0.79, 母親 $\alpha$ =0.73), 「人格的成長」 $\alpha$ =0.78(父親 $\alpha$ =0.78, 母親 $\alpha$ =0.79), 「人生における目的」 $\alpha$ =0.82(父親 $\alpha$ =0.84, 母親 $\alpha$ =0.81), 「積極的な他者関係」 $\alpha$ =0.77(父親 $\alpha$ =0.78, 母親 $\alpha$ =0.75)であった。父親の「環境制御力」に関しては $\alpha$ 係数が低いものの、その他の因子は今後の分析に用いるのに信頼性の保たれた尺度構成であることが確認された。

3. 父母間の親役割達成感の違い

父親と母親の親役割達成感の平均値(父親3.97(SD=0.61), 母親4.09(SD=0.54))についてt検定を用いて比較したところ、有意差はみられなかった( $t(372)=3.84, n.s.$ )。

4. 子どものクラスと出生順による親役割達成感の違い

次に子どもの年齢と出生順が親役割達成感に影響するかどうかを検討した。子どもの年齢については子どものクラスごとに「2歳児クラス」、「3歳児クラス」、「4歳児クラス」に分類した(以下「子どものクラス」と表記)。また、子どもの出生順については、第2子以降は人数の偏りが生じるため、第1子と第2子以降に分

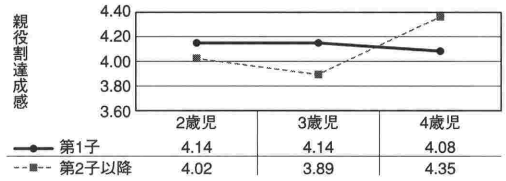


図1 子どものクラスと出生順ごとの母親の親役割達成感の平均値

類した(以下「出生順」と表記)。親役割達成感を従属変数とし、子どものクラスと出生順を独立変数とする3(子どものクラス) $\times$ 2(出生順)の分散分析を行った。

その結果、父親については、子どものクラスおよび出生順の主効果, 交互作用ともにみられなかったが、母親については、子どものクラスおよび出生順の有意な交互作用がみられた( $F(2,163)=3.25, p<0.05$ )。交互作用が有意であったことから、Bonferroni法による単純主効果の検定を行ったところ、第2子以降の母親において、3歳児クラスと4歳児クラスの間5%水準で有意差がみられた( $F(2,163)=4.40, p<0.05$ )。これらの結果より、第2子以降の母親において4歳児クラスの母親は3歳児クラスの母親よりも親役割達成感が高いことが確認された(図1)。

5. 親役割達成感と心理的well-beingの関係

父親と母親の親役割達成感の平均値に有意な差が認められなかったため、両親の親役割達成感得点の平均値4.03を基に高群, 低群に分類し、心理的well-beingの各下位尺度得点の平均値についてt検定を用いて比較した。その結果、父親については、「環境制御力」、「人格的成長」、「人生における目的」、「積極的な他者関係」の次元において、親役割達成感高群の方が低群よりも高いことが確認された。また母親については、「環境制御力」、「自己受容」、「人格的成長」、「人生における目的」、「積極的な他者関係」の次元において、親役割達成感高群の方が低群よりも高いことが確認された(表3)。

表3 親役割達成感の高低による心理的 well-being の平均値の比較

| 心理的 well-being | 父親   |        | t 値<br>df (167) | 母親   |        | t 値<br>df (167) |
|----------------|------|--------|-----------------|------|--------|-----------------|
|                | 低群   | 高群     |                 | 低群   | 高群     |                 |
| 環境制御力          | 3.24 | < 3.55 | 2.50***         | 2.95 | < 3.39 | 4.93***         |
| 自己受容           | 3.17 | < 3.36 | 1.96            | 2.98 | < 3.27 | 2.88**          |
| 自律性            | 3.57 | < 3.53 | 0.45            | 3.21 | < 3.32 | 1.18            |
| 人格的成長          | 3.63 | < 4.02 | 4.04***         | 3.58 | < 3.98 | 4.14***         |
| 人生における目的       | 3.47 | < 3.88 | 3.65***         | 3.30 | < 3.57 | 2.37*           |
| 積極的な他者関係       | 3.16 | < 3.65 | 5.01***         | 3.32 | < 3.78 | 5.14***         |

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$ 

#### IV. 考 察

##### 1. 親役割達成感について

親役割達成感について父母間に差があるのか検討した結果、有意な差は認められなかった。このことから、父親、母親の間に子育てを通して子どもとの関係性に満足感を得たり、自己の成長を感じたりする気持ちに差はないことが示唆された。

ところが親役割達成感に対する子どもの年齢や出生順の影響について検討した結果、その影響は母親のみに認められた。柏木ら<sup>4)</sup>によると、子ども・子育てに対して、父親は肯定的な感情だけを強く持っているが、母親は肯定面と否定面を合わせもつアンビバレントな感情を持っているとされている。このことを参考に結果について考えるなら、子どもと過ごす時間の少ない父親は<sup>1)</sup>子どもを否定的に捉える場面が少ないために、子どもの年齢や出生順に影響されることなく親役割達成感を評価している可能性が考えられる。

ところで、第2子以降の子どもをもつ3歳児の母親は、4歳児の子どもをもつ母親と比較して子どもとの関係性や子育てを通しての自己の成長を否定的に捉えていることが明らかになった。この結果については、第2子以降ということは養育する子どもの数も2人以上であることから、子育てに対する負担やストレスが生じ、親役割達成感を低く評価したのではないかと考えられる。しかし子どもが4歳児になると、それまでの子育てで経験を活かし、子育て役割を調整しながら親役割達成感を高めていくことが考えられる。本研究の母親において子どもの年齢や出生順が親役割達成感に影響することが見出

されたことから、親の育児関与の量や育児ストレス、子育てスキルの違いによって親役割達成感への影響が異なることが予測される。

##### 2. 親役割達成感と心理的 well-being の関係

親役割達成感の高さと心理的 well-being との関係について検討した結果、父親、母親共に、親役割達成感高群は低群に比べて「環境制御力」、「人格的成長」、「人生における目的」、「積極的な他者関係」の得点が高いことが確認された。これらの側面は父親、母親に共通して、親役割達成感が影響する心理的な発達側面であることを意味していることになる。先行研究においても、母親において母親役割達成感とこれらの心理的 well-being の次元との関連がみられており<sup>3)</sup>、本研究の結果はこの報告と比較的合致したものであるといえる。この結果からは、親が子どもや子育てを肯定的に評価することによって、複雑な環境に適応したり、連続して成長している自分を感じたり、自ら生きる目的を見出したり、他者と暖かな人間関係を築く傾向が高まることが考えられる。少子化時代だからこそ、子育ての体験は個人の心理的な発達にとって重要な役割をもつ可能性がある<sup>9)</sup>といわれているように、本研究の結果はこうした示唆を支持した結果といえよう。

一方、「自己受容」の次元については親役割達成感高群の方が低群よりも高いことが確認された。このことは、子どもや子育てを肯定的に評価する母親は、自分自身を受け入れる傾向が高いことを示唆している。女性は、母親になると「社会にかかわる自分」が小さくなり「母親としての自分」が大きくなるのに対して、男性は父親になってからも「父親としての自分」の

大きさは変化せず、「社会にかかわる自分」の割合が大きくなるといわれている<sup>9)</sup>。このことを参考に結果について考えるなら、父親については親役割達成感の高さと「自己受容」の高低に差が見出されなかったことから、男性の場合は、仮に親役割達成感が低かったとしても他の役割達成感を通して自分自身を受け入れることができると考えられる。一方、母親については親役割達成感の高さと「自己受容」の高低に差が見出されたことから、女性の場合は、母親の「自己受容」を高めるために、子育て期の母親の親役割達成感を高める支援が必要であると考えられる。

ところで「自律性」については父親、母親ともに親役割達成感の高さとの関連は認められなかった。先行研究においても母親役割達成感「自律性」と関連はないとされていることから<sup>3)</sup>、本研究の結果は先行研究と比較的合致したものであるといえる。また、「自律性」と就労との関連において、無職群より有職群の方が「自律性」の得点が高かったことから<sup>3)</sup>、父親、母親ともに「自律性」の感覚を高めるためにも子育て以外の社会的な役割の必要性が示唆された。

## V. 今後の課題

最後に、本研究の今後の課題として3点あげられる。

1. 今回、親の心理的な発達を測定する尺度として東<sup>7)</sup>が大学生に施行して作成した短縮版の心理的 well-being 尺度を使用した。本研究においては父親の「環境制御力」の $\alpha$ 係数が低かったため、大学生と子育て期の男性とでは心理的 well-being の「環境制御力」の様相が異なることが考えられる。したがって、今後父親の心理的 well-being について検討する必要がある。
2. 本研究では、親自身が親役割達成感を高く評価することで心理的な発達が促進されることを仮定してその関連を検討してきた。しかし Ryan<sup>10)</sup>は、Rrff の6次元は幸福感を育てる主要要因であると指摘していることから、心理的 well-being の高い親が親役割達成感を高く評価できることも考えられる。今

後、その因果関係を検討していく必要がある。

3. 今回、父母間の親役割達成感に差は示されなかったが、子どものクラスや出生順において母親のみ差が示された。子育て期にある男性の労働時間は長く、家族と過ごす時間が短いとの報告がある<sup>1)</sup>ことから、子どもと過ごしている間に育まれる感情、一緒に過ごすときの親役割など父親と母親とは異なることが予測される。したがって今回、父親独自の親役割達成感を正確に測定できたかどうかは疑問に残るため、今後父親独自の親役割達成感について労働時間や子育てに関与、子どもに対する感情なども調査し、検討していきたい。

## 謝 辞

本研究は、平成18年度鳴門教育大学大学院修士論文として提出したものを一部加筆、修正したものです。調査実施にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。また、修士論文をご指導いただきました鳴門教育大学の浜崎隆司教授に、厚く御礼申し上げます。

## 付 記

本研究の一部は、第62回日本保育学会において発表した。

## 文 献

- 1) 平成19年度版 国民生活白書 <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/index.html>
- 2) 土肥伊都子, 広沢俊宗, 田中國夫. 多重な役割従事に関する研究—役割従事タイプ, 達成感と男性性, 女性性の効果—. 社会心理学研究 1990; 5: 137-145.
- 3) 西田裕紀子. 成人の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究. 教育心理学研究 2000; 48: 433-443.
- 4) 柏木恵子, 若林素子. 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994; 5: 72-83.
- 5) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれにかかわる要因. 発達心理学研究 2006; 17: 182-192.
- 6) Ryff CD, Keys CL. The structure of Psychological well-being revisited. Journal of Personality

- and Social Psychology, 1995 ; 69 : 719-727.
- 7) 東 正訓. 幸福感と人間関係を心理学しよう. 藤本忠明, 東 正訓. 人間関係の心理学. ナカニシヤ出版. 2004 : 201-217.
- 8) 菅原ますみ. 子育てをめぐる母親の心理. 東 洋, 柏木恵子編. 社会と家族の心理学. ミネルヴァ書房. 1999 : 47-80.
- 9) 小野寺敦子. 親になることによる自己概念の変化. 発達心理学研究 2003 ; 14 : 180-190.
- 10) Ryan RM, Deci EL. On happiness and human potential : A review of research on hedonic and eudaimonic well-being. Annual Review of Psychology. 2001 ; 52 : 167-196.



## 小児科・小児歯科・心理・栄養のプロがまとめた 子どもの歯と口の保健ガイド

チャイルドヘルスプロフェッショナルが  
協働でまとめた6つの歯の常識

編集 小児科と小児歯科の保健検討委員会  
発行 日本小児医事出版社  
B5判 85頁 1,890円 (本体1,800円+税)

本書は、「子どもの歯と口腔の問題」を小児科医、小児歯科医さらに臨床心理士と管理栄養士が協働でまとめあげた、本邦で最初の手引き書であります。

6年前に立ち上げられた「チャイルドヘルス懇話会」が核になり、「小児科と小児歯科の保健検討委員会」が永年に亘って検討してきた以下の課題が各項目別に「現時点での考え方」としてまとめられています。

1. イオン飲料と虫歯に関する考え方
2. 「母乳とむし歯」現状の考え方
3. おしゃぶりについての考え方
4. 指しゃぶりについての考え方
5. 歯からみた幼児食の進め方
6. 子どもの歯みがき

さらに、各課題別に保健検討委員会のメンバーによる座談会の討論が掲載され、①その課題がどうして取り上げられたか、②考え方が公表されてからどう変わったか、③問題点と将来どうあるべきか、などの議論が盛り込まれています。

従来、専門家の間でも見解の相違があった「子どもの歯と口腔の問題」に対して各専門家が協働してまとめあげた本書は、理論的根拠を豊富に提示し、説得力に富み、小児保健の現場での「実際の指針」となることに疑いの余地はありません。臨床の場や保健領域での必読の書なると共に、簡明で平易な表現から、若いご両親や家庭にもお勧めの書物です。

(聖マリアンナ医科大学名誉教授 小坂橋 靖)